

見沼代用水舟運と河岸場(かしば) —江戸時代(2)—

江戸時代初期は新田開発が盛んに行われた時代です。新田開発には灌漑に必要な水源や排水路を整える必要があり、水害を防ぐために大規模な河川の工事も行われました。伊奈備前守忠次は、徳川家康の関東入国後、関東代官頭に任じられ、河川の開削や築堤、溜井(ためい)の造成などに力を注ぎました。この忠次によって造られたものの一つが備前堤(びぜんてい)です。備前堤は高虫村と小針領家村(桶川市)との間に築かれた堤防で、慶長期(1596~1615)に造られたといわれています。ところで備前堤より下流の村々は、増水時に堤防が切れると洪水などの大きな被害を受けました。それに対し上流の村々では、増水時に堤防のために水が溜まりやすくなり作物が水腐れになるなどの被害を受けることがありました。このように利害が対立する下流村々と上流村々とは、備前堤の高さをめぐりしばしば激しく争いました。こうした争いが幕府の評定所(当時の最高裁判所)で取り上げられることもあり、裁判の結果、文政10年(1827)には堤の高さが決められました。その時に決められた高さの杭が「お定杭」として現在でも堤防上に残っているものです。

江戸時代の後期、幕府の財政は窮乏してきました。8代將軍徳川吉宗は幕府財政の建て直しなどを図るため、享保の改革を行いました。改革の重要な柱のひとつが新田開発です。見沼代用水は、この新田開発のために享保13年(1728)につくられた灌漑用の用水で、下中条村(行田市)で利根川から水を引き、見沼新田(さいたま市)まで引かれました。この大工事を指揮したのは井沢弥惣兵衛為永(いざわやそべえためなが)です。為永は紀州(和歌山)藩士でしたが、紀州でも優れた土木技術者として実績をあげており、徳川吉宗が將軍になると、幕府に登用されました。見沼代用水にはさまざまな工夫がみられます。用水路が元荒川と交差する柴山(白岡町)では、元荒川の下に用水をくぐらせるため、元荒川の河床下に

木製の樋を埋め込みました。これを『柴山伏越(しばやまのふせごし)』といいます。樋は明治22年(1889)煉瓦製、昭和3年(1928)にコンクリート製になりましたが、現在でも見沼代用水は元荒川の下をくぐって流れています。見沼代用水はさらに下流の上瓦葺村(上尾市)で綾瀬川と交差します。ここでは、伏越のように川の下をくぐらせるのではなく、綾瀬川の上に木製の樋を通す掛渡井がつくられました。これは、後に述べる見沼通船に支障をきたさないように配慮したことや、掘削によって水位が低くなりすぎるのを避けるためなどと推測されています。その後、掛渡井は明治41年(1908)に煉瓦と鉄製の掛樋井へ、昭和36年(1961)にはコンクリート製の伏越に改築され現在に至っています。

見沼代用水が開削されると、用水としてだけではなく通船にも利用されるようになり、柴山伏越より下流で通船が行われました。通船区間の最北端にあたる上平野村には、運賃の徴収や運送事務を扱う会所が設けられました。運搬された主要物資は、用水路沿岸周辺村々の年貢米でした。また、市内では、見沼代用水・綾瀬川・元荒川で通船が行われ、荷物の積み下ろしを行う河岸が設置されました。見沼代用水沿いに「積場」と呼ばれる河岸が設けられました。そのほか、川島には江戸時代~明治初期に河岸があったという記録もあり、また大字馬込八番には「帆立山(ほだつやま)」という呼称が残っており、ここにも河岸があった可能性があります。

明治に入り鉄道が開通すると舟運が衰退し河岸が姿を消すようになりましたが、見沼代用水が東北本線と高崎線の間を流れていたため鉄道開通の影響を直には受けず、平野河岸などではしばらく通船が続けられました。しかし、道路の発達により陸上交通が活発になると、通船は衰退していき、昭和6年(1931)、通船事業は幕を閉じました。



高虫村ほか5か村組合用水絵図

備前堤(赤)や見沼代用水と元荒川の立体交差の他、綾瀬川側の田んぼへ供給される小さな用水なども記録されています。



柴山の伏越工事絵図

【発掘調査からの事例】

● 白岡市入耕地遺跡

白岡市入耕地遺跡からは、マグロ(輪切り)やカツオ等が発掘されました。外洋から利根川・江戸川を運ぶ早船により江戸に運ばれた鮮魚を何らかの理由によりこの地まで運ばれたものなのでしょう。



瓦葺の掛樋井絵図

見沼代用水を通船している様子が描かれています。



★ 地図に見える河岸場

● 呼称や記録に残る河岸場

瓦葺の掛樋井

関東流水図
(蓮田周辺抜粋)

村むらの信仰と文化 —江戸時代(3)—

江戸時代は、庶民の信仰が様々な形で栄えた時代で、村人の信仰の中心は寺院と神社でした。市域には古くからいくつかの寺院があったようで、江戸時代以前に開かれた由緒をもつ寺院もあります。江戸時代の寺院は、仏教を伝える宗教施設としての役割より、檀家の出生から葬祭までを管理する菩提寺(ぼだいじ)としての役割が大きかったようです。

対して神社は、由緒を伝える例は少ないものの、江戸時代後期には市域に93もの神社があり、四季折々の神事や祭礼の場として活用されていました。

市内に残る民俗行事の県指定民俗文化財「閨戸(うるいど)の式三番(しきさんば)」は、秋の豊年(豊作)、繁栄を祝うものです。また、市指定文化財の「伊豆島(いずしま)の大蛇(だいじゃ)」や高虫・上平野・井沼・駒崎・根金・閨戸で行われてきた「お獅子様(おししさま)」(春)と黒浜などで行われた「天王様(てんのうさま)」は、村内の悪魔払い、疫病除け、五穀豊穡などを祈るものです。こうした祭礼は、現在でも江戸時代の村があった地域ごとに行われているところが多く、江戸時代からずっと続けられてきたことがうかがえます。また、神社には「力石(ちからいし)」が残されていたりします。これも農閑期の祭りの時に力比べなどを行い、村人の娯楽の場となったことでしょう。

【注意】屋外の「庚申塔」脇に『力石』は展示しています。

江戸時代は、庶民の教育が盛んになった時代でした。江戸時代は、それまでの時代とくらべ、年貢や村政、訴訟のためなど、たくさんの文書がつくられた時代です。こうした文書を理解し、年貢を納めたり、権利を主張するために文書を読んだり書いたりする機会が増えてきました。また、農作を発展させるためには、農作業の方法を解説した農書を読む必要

があったことも、読み書きが求められる原因となりました。

庶民の教育機関として代表的なものは寺子屋です。江戸時代中期以降、各地に寺子屋が開設され、子供たちに読み・書き・そろばんを教えました。市内にも、松齡堂(井沼)、南学院(江ヶ崎)に寺子屋が存在し、僧侶や農民の師匠(ししょう)が筆子(ふでこ:寺子屋の教え子)の教育にあたりました。師匠が亡くなると、かつての筆子たちが師匠を慕って供養塔を建てることがありました。この供養塔のことを「筆子塚(ふでこづか)」といいます。筆子塚は、現在でも市内数か所に残されています。

江戸時代の中期以降になると、庶民の旅行も盛んになりました。庶民の旅が盛んになったことは、それまでに比べて生活に余裕が出てきた証拠といえるでしょう。

江戸時代の農民は、村から自由に移動することは原則禁止されていましたが、寺社への参詣は信心ということで比較的簡単に許可が下りていました。参詣には、講(こう)と呼ばれる組織をつくり、毎年金銭を積み立て、その積立金で代表者が参詣しました。代表者の選び方は、順番だったり、くじ引きだったり様々でした。御嶽講(おんたけこう)や大山講(おおやまこう)などが組織され、御嶽山(東京都:御嶽神社)や大山(神奈川県:阿夫利神社)などに参詣していました。また、関東近辺だけでなく、出羽三山や伊勢のような遠方へも参詣することがありました。遠方への参詣は費用がかかるため、上流の人々だけが行ったようです。伊勢や西国へ行ったときの日記では、旅行の日程は71日にも及び、途中、富士山に登ったり、熊野(和歌山県・三重県)や大坂・奈良・京都を廻り、金毘羅(香川県)・天橋立(京都府)・善光寺(長野県)などをめぐり戻ってきたことがわかります。



弘化4年銘庚申塔
(大字貝塚地内)



伊豆島の大蛇

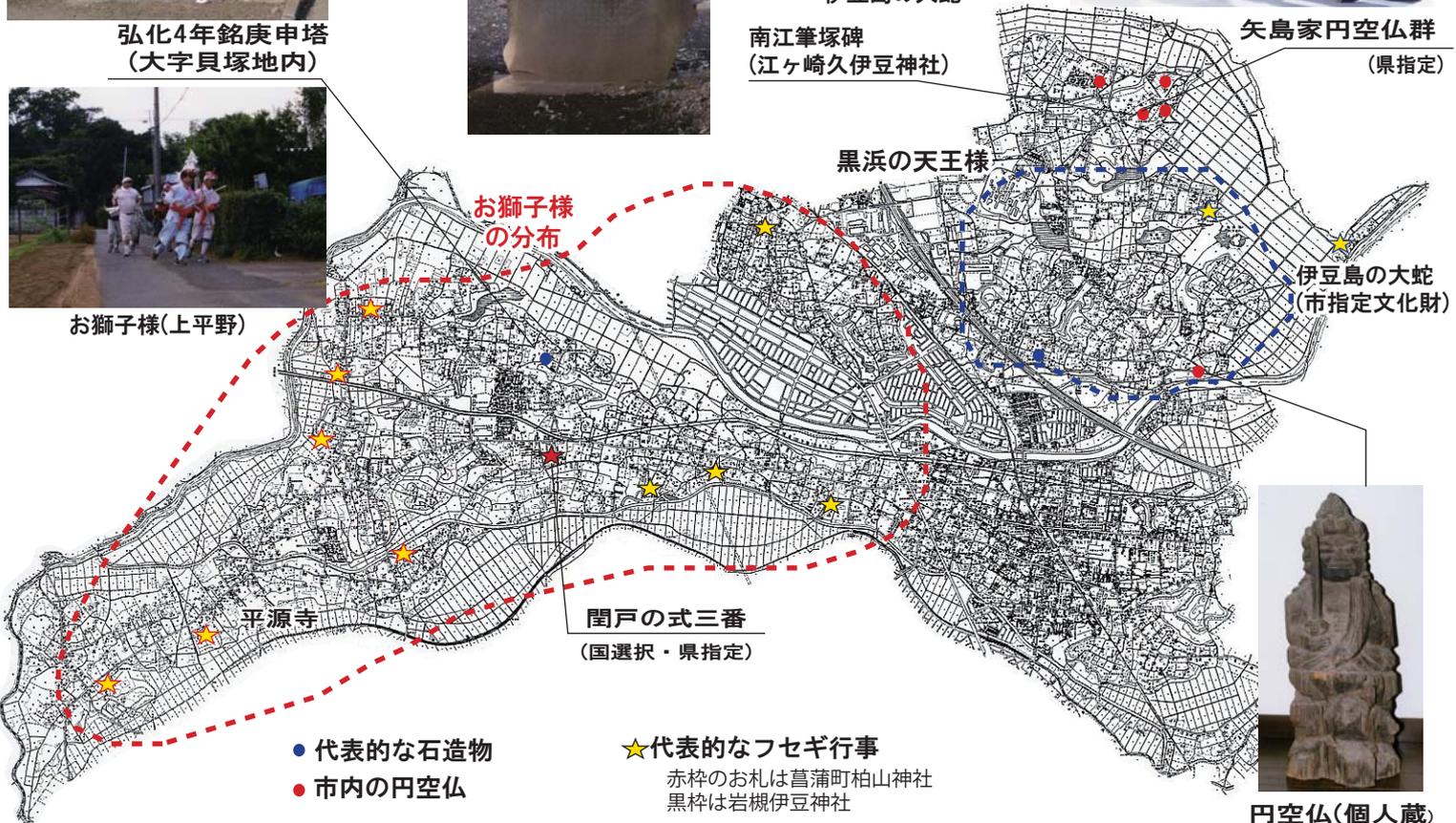


矢島家円空仏群
(県指定)

南江筆塚碑
(江ヶ崎久伊豆神社)



お獅子様(上平野)



- 代表的な石造物
- 市内の円空仏

- ★ 代表的なフセギ行事
- 赤枠のお礼は菖蒲町柏山神社
- 黒枠は岩槻伊豆神社



円空仏(個人蔵)

黒浜の天王様

閨戸の式三番
(国選択・県指定)

平源寺

伊豆島の大蛇
(市指定文化財)